

高校改革で変わる中学校教育

小林 朗

新潟学区の受験競争が激化

高校入試では、第三学区（新潟学区）が県内随一の激戦区です。公立全日制一三校、単位制二校、私立八校がひしめいて、公立高校間の格差が広がり順位づけられています。これに私立高校のサバイバル競争が加わって、受験競争を激化させています。県教委はいままでも入試制度の改革で隣接学区からの入学を一定数許容してきましたが、新潟学区では来年度から広域合併で新たに公立七校が加わって公私立三〇校という巨大学区になります。中学校の進路指導もますます大変になります。中学校はこの高校に何人入れたか、

高校はこの大学にどれだけ入ったかを競う大競争時代になってしまいます。激しい受験競争の中で子どもたちはどうなるのか本当に心配です。

普通科推薦入試の影響

保護者や子どもたちの高校進学に対する関心は非常に高く、中学校教育は大きな影響を受けてきました。八割の子どもが学習塾に通っていますし、新しい学科の導入で受験戦線が変化します。また、普通科への推薦入試の導入で、落ちても当たり前ということで上位校への志願者が増大しています。しかし、落ちればシヨツ

クですから、一般入試ではランクを下げることに
 して、子どもたちの心の傷も大きくなります。入試は公
 立推薦、私立専願、公立一般、私立一般、公立二次と
 受験機会が増えただけ、子どもたちのストレスが大き
 くなり、教師の仕事も増えました。卒業式までにクラ
 スの三分の一は高校合格が決まっております、同じ気持ち
 で卒業できなくなってきました。

推薦入試は学力試験がなく、調査書の比率が高いた
 めに観点別評価や総合評価などの態度点が高いとい
 います。これまでも意欲・関心・態度重視の新学力観の
 影響で、子どもたちの地域ボランティア活動への参加
 が増えるとか、校外一斉清掃に参加して調査書にかい
 てくれとせまるとか、何事にも点数第一主義が広がっ
 て、得になることにだけ敏感な子どもが目立つようにな
 りました。これでは奉仕活動とは名ばかりで、子ども
 たちの人間的成長にとつてかえって弊害が大きいとい
 わざるをえません。推薦入試はこういう傾向をいっ
 そう助長しています。ですから、推薦入試の普通科へ
 の拡大は中学校ではきわめて不評です。

絶対評価で現場のとまどい

絶対評価には良心的な教師ほど悩んでいます。高校
 入試の調査書も絶対評価で記入することになって、そ
 の影響も大変になりました。より正確な評価にしよう
 とすれば評価項目を増やし、それぞれに評価基準を設
 定しなければなりません。何重にも評価するために、
 それぞれデータをとっておき、学期末に集計する時に
 は大変な作業量になります。みんな一週間以上かかっ
 て作業しています。それでも子どもたちから「あの子
 は四なのに、どうしておれは三なんだ」といわれます。
 保護者も聞いてきます。評価のために子どもや保護者
 との信頼感が損なわれます。絶対評価とはいっても、
 テストの点数のように客観的な明瞭さがないからです。
 どうしても評価に主観が入らざるを得ませんし、教師
 の迷いも生じます。

職場の多忙化と管理統制の強化

いままでも職場の多忙化が問題になっていました。
 県・市教委への報告書や事務的仕事が多いとか、手
 かかる子どもが増えたことによるといわれていました。
 どこの学校でも教務室の電話は鳴りっぱなしです。手
 のかかる子どもが増え、自分の子どもしか目に入らな

い保護者も多くなりました。これに絶対評価が加わって先生方からゆとりを奪っています。どの子にも基礎学力と社会性を身につけるようにはげまし、ホームルームや個別に親身な進路相談をすることに時間をとられるのではないのです。評価や調査書作成という事務的作業に追われています。

さらに、教師への管理も強化されています。最近、管理職は「公開授業をやれ」というようになりました。指導と評価は一体の流れだから、研修が大事だといえます。しかし、教科ごとにはいっても教師にとつては大変なストレスです。職場の支え合いの上で行われる自主的な研修とは違います。子どもの遅刻や全校集会の整列などなんでも点数化、数値化して評価することが広がってきました。それが教師評価、学校評価につながります。夏休みや冬休みの長期休業中も必ず出勤せよ、民間と同じにといわれ、職員レクや職員旅行もできなくなりました。休み時間もパソコンに向かわざるを得ない状態で、職員同士の対話が減って、教室から笑い声が消えました。

新たな「荒れ」の広がり

教師が分断され、孤立させられて、自分の授業やクラスなどのエリアを守ることにきゅうきゅうとし、全体を見る教師が少なくなっています。受験競争が激化する中で、子どもたちもいっそう孤立感を深め、ストレスをためこみます。いま、厳しい受験競争から落ちこぼれてしまった子どもが増え、不登校や新たな「荒れ」が市内全域に広がっています。管理統制の強化や職場の多忙化などの矛盾は子どもたちに集中します。荒れる子どもたちをしめつけるだけの管理主義教育を徹底しても、いまの学校教育がかかえる問題をどう解決していくのかという視点を持たない限り、対症療法で終わってしまうことになりかねません。一見、落ち着いたように見えても、再び大きく吹き出してくるのは目に見えています。

それでもがんばる教師たち

授業時数確保と厳しくいわれても、多くの教師は子どもの豊かな発達を保障する行事を削ることに反対しています。義務教育としての国民的教養や市民的モラルはきちんと教えようと、どの教師もがんばっています。本格的に教材研究にとりくむ余裕がなく、教科書

だけがバイブルになっても、子どもがわかる授業、楽しく学べる授業をめざして工夫しています。決して、受験教育だけに埋没しない教育理念が生きています。子どもたちと心を通わせるにはどうすればよいか、日々
の生活指導の中で悩んでいます。どんなにばらばらにされ、職員会議が形骸化しても、職員同士の励ましや支え合いがなくなったらわけではありません。受験競争を勝ち抜いて上位校に合格する勉強一辺倒の子どもより、生活力や社会性があって、クラスのまとめ役をつとめたり、弱い子を支える優しさをもっている子どもを評価しています。

新潟市教委は来年度から一斉に二学期制を実施する計画でしたが、「授業時数確保」「教師の意識改革」のためと説明せざるをえず、市議会や保護者から批判や疑問の声が上がり、「教職員の合意」と「保護者の大方の賛同を得る」ことが条件となりました。来年度から実施する学校は小学校で四割、中学校でも約半数となる見通しです。教師のがんばりと保護者の見識が歯止めになったのではないのでしょうか。

(こばやしあきら 新潟市教職員組合)

